

# 第五章

## 都 市

——自分のいない場所がパラダイス——

松岡 光治



ジョン・オコーナー『日没——ベントンヴィル・ロードから見た  
セント・パンクラス駅ホテル』（1884年）

産業革命後に計画もなく無闇に大きくなったヴィクトリア朝の都市は、カーライル、ディケンズ、ラスキン、モリスといった有名な文芸家たち、そして自然保護運動家オクテイヴィア・ヒルや近代都市計画の祖エベニーザ・ハワードに代表されるような、多くの社会改革者たちによって批判された。しかし、夢をかきたてるような、神秘的で華美な都市に魅了され、相反する感情を抱く画家や作家も少なくなかった。例えば、本章の口絵に用いたジョン・オコーナーの『日没——ペントンヴィル・ロードから見たセント・パンクラス駅ホテル』（一八八四年）では、大英帝国の首都に対する彼の矛盾した感情が描出されている。前景では、ロンドンの典型的な街路に見られる路面電車、馬車、群集、商店、そして右手前の屋上に積まれたガラクタ類が、都市の日常的な単調さを強調している。一方、後景の夕焼け空では、ロンドン名物の霧の中から浮かび上がったセント・パンクラス駅ホテル（一八六八年開業）のネオ・ゴシック様式の尖塔が、中世の大聖堂か古城のように美しいシルエットとして非日常的な幻想を生じさせ、現実的な前景と絶妙な対照をなしている。

小説家ギッシングにとつてのロンドンもまた、悲惨な貧困生活と不幸な結婚生活を余儀なくされた彼が、孤独と不安によってアイデンティティの危機に陥り、たびたび田舎や外国へ現実逃避することになる幻滅の都市であると同時に、その幻想的な魅力と知的な刺激が彼を引きつけてやまない創作活動の磁場で

あった。このような両価感情はギッシングの郊外や田舎に対する態度にも見られる。いや、彼は教育、階級、女性、結婚、金銭をはじめとする様々な問題に矛盾した感情を抱き、その激しい葛藤に絶えず苦悩していたのである。引越しを繰り返した彼の亡命者のような漂泊の生活は、そうした両価感情ゆえの苦悩の結果だと言えるかも知れない。本章では、都市に対するギッシングの矛盾した感情に注目しながら、帝都ロンドンの外的な力からは逃れることができないという彼の決定論的な見解を検証してみたい。

## 第一節 階級の壁と都市の街路

後期ヴィクトリア朝を生きたギッシングは、彼が先輩作家として敬意を払って批評書まで書いたディケンズとの間に、大きな世代差を感じていた。そのような意識を育んだのは、一八六七年の第二回選挙法改正による選挙権の拡大、七〇年の初等教育法による文盲率の低下、米独の資本主義の急速な発展による七三年からの大不況、そして大不況の深化による八〇年代初頭の社会主義運動の興隆といった時代の変化であった。ギッシングが死んだ一九〇三年に生まれ、同じように彼との世代差を感じていたオーウェルが言ったように、ギッシングが長篇小説で労働者たちを描き始めた頃のロンドン<sup>②</sup>は「八〇年代の霧に閉ざされ、ガス灯がともったロンドン」、すなわち一八八一年にワ

トソン博士と知り合つてベイカー街の下宿で共同生活を始めたシャーロック・ホームズのロンドンである（ギッシングは八四年末から六年間その近くに住んでいた）。そして、社会史家ブリッグズの言葉を借りれば、「ディケンズのロンドンとフェビアン主義が大きな影響を与えたエドワード朝のロンドンを結びつけている」<sup>3</sup>のが、ギッシングの小説なのである。

しかし、ディケンズとギッシングの労働者階級の描写に見られる差異は、世代的な違いよりも氣質的な違いの方が大であるように思える。その証拠に、ギッシングの処女作『暁の労働者たち』（一八八〇年）の冒頭は、読者に対する語り手の次のような誘いの文句で始まっている。

読者の皆さん、私と一緒にホワイトクロス・ストリートを歩いてください。貧民たちの市が立つ土曜日の晩は、この大都市の疲れた賃金労働者たちが、明日は奴隷のような仕事がないと思つて安心し、一週間の中で心おきなく気晴らしのできる唯一の晩なのです。……これら「スラム街の住まい」の一つを選んで、その入り口まで群集を押し分けながら進み、不快な悪臭を我慢できるかぎり覗いてみましょう。恐ろしい暗闇の中で目を凝らすと、私たちには行き止まりの路地が見えます。言葉では表現できない忌まわしいものが、向こう側で点滅しているガス灯によって薄ぼんやりと見えるのです。

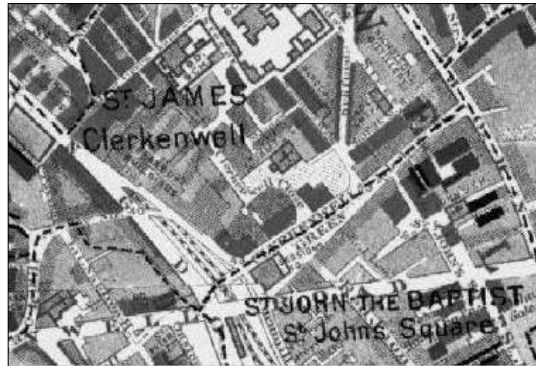
（第一部第一章）

ここでの読者は作者ギッシングと同じ（下層）中産階級が想定されている。都市の中心部でゲッター化されたような、そうした貧民街を一緒に見ようとする語り手と読者の、言わば植民地主義的な視点はディケンズやギヤスケルにも見られる。語り手が中産階級の読者を導いてロンドンの労働者階級の世界を見せるとき、その悲惨さをリアリステックに描く点でギッシングはディケンズに似ているが、それは表層的な類似にすぎない。つまり、子供時代の記憶に基づいて描写するディケンズがスラム街の悲惨な生活に対して同情的であるのに対し、大人の体験に立脚したギッシングの描写は「不快な悪臭」や「忌まわしいもの」に対して反感的である。ディケンズは労働者まで視点を下げることができるが、ギッシングの視点は距離を設けたままであるギヤスケルの視点に近い。とはいえ、ギッシングが大眾としての労働者に対してギヤスケルのように同情や共感を抱くことは決してない。

『ロンドンの労働とロンドンの貧民』（一八六一年）を出版した翌年、ヘンリー・メイヒューは熱気球に乗って首都ロンドンを上空から一望のもとに眺めた。ボードレールの男性遊歩者のような語り手に導かれて陸続と街路を見せられる『暁の労働者たち』の読者もまた、そうした気球から都市全体を見下すようなパノラマの視点を与えられる。その点において興味深いのは、『チャールズ・ディケンズ論』（一八九八年）の中でギッシングが、「ディケンズは一段高い場所から貧しい人々を見下ろして

発言したり考えたりすることができない」(第十章)と述べていることだ。これに関してビクター・キーティングは、ディケンズがロンドンの労働者階級を描く場合、彼らは社会の一部となるのに対し、ギッシングがそうする時はいつも「階級の壁」が再確認されると言っている。<sup>(4)</sup> イギリスにおける貧困の科学的調査の創始者で、一八八九年に『ロンドンの人々の生活と労働』を著したチャールズ・ブースはロンドン住民を八つのクラスに分類し、その財政状態を七つに色分けした地図(図①)を作成して、貧富の空間的な分布状態を明らかにした。ギッシングのロンドン<sup>(5)</sup>は富の分配が地理的に色分けされた都市であり、ブースの地図のように街路間の境界がはっきりしている。ギッシングの小説に通底する点は階級の違いが街路の違いとなっていることである。ディケンズやギヤスケルといった前世代のヴィクトリア朝作家は階級の壁を乗り越えることに関心があつたが、ギッシングはその壁を再建あるいは強化することに関心があつたと言つてよい。

『暁の労働者たち』に登場する洗練された知的なヘレン・ノーマンは、社会の改革と個人の芸術の板ばさみで苦しむ主人公アーサー・ゴールディングの芸術的側面を体現している。その意味で、この小説をギッシングが執筆する動機の一つとなった社会改革の目的について考えると、コントの『実証哲学講義』(一八三〇〜四二年)を読んで「ロンドンのように混乱した大都市の方が私の力を発揮するのにふさわしいのではないかしら」



図① チャールズ・ブースが1889年に描いたロンドンの貧困に関する図形マップの一部

(第一部第十四章)と言うヘレンが、実証主義とロンドンを結びつけている点は注目に値する。要するに、社会問題を実証主義的に——経験的な事実の観察を重視して——論証するには、労働者たちが群居する都市以上によい場所はないと、ヘレンは考えているのである。

しかし、ギッシングのような芸術志向の強い人間にとって、実証主義理論は物質的、唯物論的、具体的すぎたようである。アーサーとヘレンの社会的な目的が達成されず、彼らが敗残者と

なるのはそのためだ。ドイツ観念論哲学を研究したヘレンはイースト・エンドのスラム街に入って貧しい人々の間で隣保事業<sup>セツルメント</sup>に携わるが、結局は郊外のハイベリーに落ち着き、子供時代の田園的な環境を再構築してしまう。彼女はたとえ都市の中にも社会的な壁を意識し、個人的な慰安のために文化的な飛び地<sup>フリースペース</sup>に逃避する。ロンドンに接近はする（実証主義的に大衆に関心は示す）が、すぐに反感を抱いてしまうのだ。芸術を志向する（私領域）と社会改革を志向する（公領域）が相互に作用することはないのである。

ディケンズは、『ピクウィック・クラブ』（一八三六―三七年）が端的に示しているように、都市の情景に多数の人間を登場させることで生命力を与える小説家である。しかし、ディケンズが憂鬱な日曜日におけるロンドンの風景を描いた『リトル・ドリット』（一八五五―五七年）の第一部第三章の「我が家」に、ギッシングは「ユーモアを完全に失ってしまい、この大都市を何か気むずかしい感じで眺めている」（「チャールズ・ディケンズ論」第九章）先輩作家の姿を見出している。『リトル・ドリット』のロンドンには抑圧的な社会を象徴する牢獄<sup>プリズン</sup>の壁という不変のイメージとして支配している。そこでは牢獄の壁という不変の物理的な形が強調され、それが個人の意志をもととせずに入間を孤立させる障壁となる。この障壁を平面化したものがギッシングの作品に頻出する「街路」である。つまり、『リトル・ドリット』で描写されたロンドンこそ、ディケンズのリアリズム

ムの流れを汲むギッシングの眼が捉えたロンドンなのだ。

ギッシングの登場人物たちは街路や居住区を階級的に画定されている。その区画を越えて互いに関係することはない。ロンドンは断片化された街路の連続体にすぎないのだ。『暁の労働者たち』でも、ヘレンの社会はロンドン北部の郊外ハイベリーで、アーサーが結婚する墮落した貧しいキャリア・ミツチエルの社会はトテナム・コート・ロードの貧民街に定められている。アーサーがキャリアの飲酒癖を直すために北西郊外のハムステッドに連行した際も、そのような彼の田園趣味<sup>パースペクティブ</sup>は彼女の都会性に逆襲される。事実、彼女は最初はハイゲートへ、次にキャムデン・タウンへ、最後はトテナム・コート・ロードに逆戻りしてしまう。キャリアは「運命の女神の声に従った」（『第三部第三章』）だけなのだが、ギッシングの小説における運命の女神とは外界、すなわち不変の階級的な壁を擁立しているロンドンという都市に他ならないのである。

## 第二節 人間を疎外する近代都市

十九世紀中葉に〈世界の工場〉として空前絶後の経済的繁栄を誇り、世界の通商金融市場を支配していたイギリスも、一八七三年に始まる世界恐慌を起点として九六年まで恒常的な不況に陥った。この大不況は機械の改良による熟練労働の解体と農業不況による不熟練労働者の都市への流入を通して大量の失業

者を生み、一八八〇年代初頭に社会主義運動を復活させることになる。一八八四年〜八五年にかけて中産階級の知的エリートたちによって結成されたフエビアン協会や社会主義者同盟は、ヴィクトリア朝初期のチャーティスト運動がイングリランド北部の産業都市を中心に展開されたのに対し、首都ロンドンを中心に活動した。そして、こうした社会主義運動に支えられた失業者たちは不満分子となり、パリで起こった一連の革命を通して支配階級に不安を与えていた。

「ブラック・マンデー」と呼ばれる一八八六年二月八日、トラファルガー広場での三〜五千人の失業者の集まりは暴動となり、ペルメルを中心としたウェスト・エンドは数時間にわたって民衆の手中に落ちた（本書第七章・図③）。ギッシングにとつて社会主義運動は、人間の個性に脅威を与え、彼が何よりも大切にした教養・文化を破壊する民衆に権力を与えるだけであるように思えた。彼に『民衆』（一八八六年）を書かせる動機となったのは、そのような社会主義観である。とはいえ、『民衆』は「イギリス社会主義の物語」という副題とは裏腹に、二つのカテゴリーの対立——社会主義と保守主義をそれぞれ代表するロンドンの急進的な労働者リチャード・ミューティマーと田舎に住む旧地主階級のヒューバート・エルドンという個人の対立——を描いたものになっている。

思わぬ遺産を相続したミューティマーは地方の自然を破壊して新しい産業都市（ニュー・ウォンリー）を建設し、その地方

の社交界に入ろうとする。だが、彼の運命が定められたものだと考えるギッシングは、階級の壁を強化して彼を労働者たちの住むロンドンへ最終的に戻すことで、「商人根性の染み込んだ」（第三十章）英国の社会主義を嘲罵する。一方、今では斜陽階級となったエルドンは産業革命以前の社会の価値観を代表する人間であり、芸術の世界へ逃避したいというギッシングの願望を体現している。結局、ミューティマーは没落して暴徒の投石で殺され、エルドンが産業都市を逆に破壊して以前のような美しさと静けさを持つ田園（ウォンリー）に戻す。これは単に保守主義の勝利を意味するだけではない。それは産業の拡張を反対方向に転換して審美主義的な理想をかなえた行為であると同時に、エルドンが近代社会では疎外されていること、そして社会的な壁の中で作者自身が孤立していることを暗示している。要するに、産業化された近代都市には知識人や芸術家の居場所はなく、そこでは疎外されて孤立するしかないのである。

都市は個人が群衆の一人として溶け込むことで匿名性を提供する。窃盗の罪を犯したギッシングがアメリカに逃避し、一年後に帰国して即座にロンドンへ出た理由は想像にたたくない。しかしながら、都市空間の匿名性は社会的な疎外と人間の孤立感を生む。労働者階級の貧困を扱った最後の小説『ネザー・ワールド』（一八八九年）では、ロンドンの都市化による人間の疎外が最も悲観的に描かれている。『ネザー・ワールド』でロンドンを描く際のギッシングの実証主義的な正確さは、この都市

のユニークな発展の点から説明可能である。北部の産業都市では労働者たちが製造工場で集団として組織化されていたのに対し、大英帝国の中心であるロンドンでは銀行業や保険業などが発展し、不動産価格の上昇で大規模な製造工業は発展を抑止された。その結果、首都ロンドンは「熟練工や職人の都市」となってしまったのである。

シドニー・カークウッドのような熟練工の大半は、ロンドンの富裕層のために工芸品の生産に従事していた。カークウッドの住むクラークンウェル(図①)は、そうした熟練工たちが住む地区の典型である。クラークンウェルはロンドンにおける宝石製造の中心地で、熟練工たちは特殊な道具を共有する必要から当地での定住を余儀なくされた。一方、重工業がロンドンを無視していたことに加え、当時は農業不況によって田舎から都会への人口流入が続いていた。この首都の人口増加は不熟練労働者の余剰につながり、一八八〇年代に一連の騒動を生み出すことになる。結果的に日雇い労働者が激増し、彼らは仕事が朝早く始まることもあってロンドンに住まねばならず、多くのスラム街が形成されてしまったのである。

ロンドンの発展に伴う別の興味深い現象として、都市中心部の空洞化と人口減少によるスラム街の周縁化が挙げられる。一八六〇、七〇年代には大英帝国の威信をかけてロンドン中心部で貧民街撤去がなされ、銀行、事務所、倉庫、駅などが建設された。一八五三年から一九〇一年までに七万六千人が鉄道建設

のために立ち退きを強制され、彼らの住まいは周縁化されていた。ドレの『ロンドンの上空を——列車で』(図②)に見られるように、鉄道の高い軌道や深い堀割は社会的なゾーンを隔離する障壁を形成した。<sup>(8)</sup>一八七五年の職工住宅法もまたロンドン中心部のスラム街を撤去し、鉄道との一体化によって都市を再開発するものであった。その結果、クラークンウェルはフアリンドン・ロードとクラークンウェル・ロードに囲い込まれ、シティーと切り離されて孤立してしまった。この境界線の重要性



図② ギュスターヴ・ドレ『ロンドンの上空を——列車で』(1870年)

にギッシングは着目する。例えば、クレム・ペコヴァが郊外にあるバートン・クレセントの自宅から南下し、実家の下宿屋のあるクラークンウェルへ戻る場面で、「シティー・ロードを横切ったあと、クレムは生まれ育った土地に足を踏み入れた」(第三十五章)と記されている。

ディケンズの『荒涼館』(一八五二―五三年)の登場人物の多くはホルボーンとシティーの区域に住んでいたが、ホルボーン地区からはスラム街の撤去で一八三〇年から半世紀の間に十万人が追い出され、シティーの人口も一八六一年から八一年の二十年間に半減した。彼らが住んでいたチャーンスリー・レーンの周辺は、『ネザー・ワールド』の頃には非住居地域になっている。つまり、『ネザー・ワールド』の中心地がホルボーンの北側に位置するクラークンウェルへ変わったことは、人口の分散化とスラム街の周縁化を意味しているのだ。ディケンズは『荒涼館』の中で「霧」という包括的なイメージを使い、大都市ロンドンを統一<sup>一</sup>体として捉えた。産業革命を経て巨大化・複雑化した帝都ロンドン<sup>二</sup>は、ヴィクトリア朝後期にはもはや有機的な社会の統一<sup>三</sup>体として捉えることができなくなっていた。『ネザー・ワールド』でギッシングが描いたロンドンは、断片化された社会空間の連続<sup>四</sup>体としての都市になっている。大都市の中で労働者階級の分散化と周縁化が起こり、ロンドン<sup>五</sup>はクラークンウェルのように孤立した多くの特殊な区域からなる都市、すなわちブースが色分けして詳細に描写できるような都市

になったのである。

人間は遺伝や環境に従属するもので精神的な変化は望めないというギッシングの自然主義的なりアリズムは、都市の場面から個人的な理念——例えば、ディケンズに時として見られる個性的な解釈による主題の美化——を削り取り、そうすること都市化した社会における人間の疎外を強調している。レイモンド・ウィリアムズは『田舎と都会』で「ディケンズにおいては物理的な世界が人間と関係しないことは決してない。それはディケンズが作り、解釈したものである」と断じた<sup>⑩</sup>。ディケンズの都市はそこに住む人間と語り手の声で構造物を人間化していた。一方、ギッシングのロンドンでは、型彫り師で贋金作りに手を出すボブ・ヒューイットは孤独であり、明らかに自分自身が作つたものではない周囲の都市の構造物から疎外されている。『ネザー・ワールド』は小説の最後の一行に明示されているように、「奈落の底まで敗残者たちであふれさせる社会の非情な力に対する抗議」(第四十章)の書である。ギッシングの世界では、労働者階級だけでなく下層中産階級でも、志を立てた人物が生存競争から脱落し、近代都市ロンドンの外的な力によって疎外される。そのような敗残者たちが集められたギッシングの小説は、中産階級——ピューリタンの自助<sup>⑪</sup>の精神と実学<sup>⑫</sup>の精神でヴィクトリア朝中期の繁栄を支えた中産階級——の様々な立志伝の中の人々からなるサミュエル・スマイルズの『自助論』(一八五九年)と対蹠的な世界だと言えるだろう。

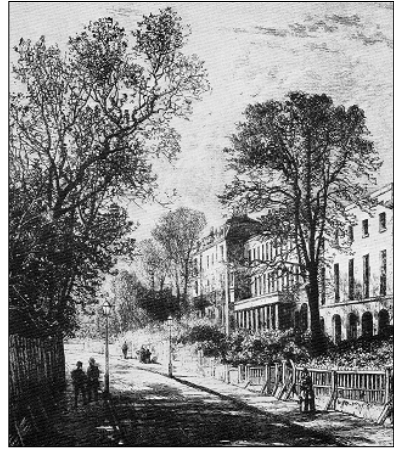


### 第三節 都市と郊外の同一化

一八五〇、六〇年代の〈イギリス大好況期〉の嚆矢となるロンドン万博（一八五二年）において、鉄道利用の割引料金で一般大衆の団体旅行を企画して成功したトマス・クックは、ロマン主義的魅力を持つスイスや教育的価値の高いイタリアに目を向けるようになり、一八七三年には『ヨーロッパ鉄道時刻表』を発行し、それまでは特権階級だけのものであった外国旅行を中産階級にも可能にした。『ネザー・ワールド』を書き上げたギッシングは、一八八八年九月末に少年時代からの憧憬の地であったイタリアへ旅立ったが、その旅の様子が手紙を通してよく分かるように、妹のマーガレットにクック社の『南イタリア・ガイド』を送っている（*Letters* 3: 275）。そして翌年十一月にも、彼は自分の教育の基礎工事を仕上げるためにギリシャへの旅に出た。多くの批評家が指摘するように、ギッシングがロンドンを離れた二回の大陸旅行を彼の生涯における転換点と見なすことは可能である。彼自身も旅行中に日記の中でロンドンの都会生活を呪い、「私は海峡を渡ると純粹素朴な詩人となった」（*Diary*）と書いているからだ。さらに、二回目の大陸旅行から戻って約一年後の一八九一年一月、彼はロンドンから逃れてデヴォン州のエクセターへ引越し、二年間そこで生活することになる。

一八八〇年代のギッシングの小説は、その大半が陰鬱な労働者階級に焦点を当てたものであったので、このようなロンドンからの脱出は彼の気持ちを幾らか楽観的、審美的にしたようである。例えばマイケル・コリーは、「ギッシングは『ネザー・ワールド』出版後、人物と物理的環境との決定論的相関関係から逃れるようになった」（*Collier's Atlas* 48）と論じている。しかし、この人間と空間との「決定論的相関関係」はギッシングの小説を通して常に維持されているので、その関係が以後の作品では単に他の社会領域に移されただけだと反論せざるを得ない。というのは、登場人物がどこにいようと、ギッシングの小説ではロンドンの支配体制から逃れる道はないのだから。

『ネザー・ワールド』のクラークンウェルから『女王即位五十年祭の年に』（一八九四年、以下『五十年祭』と略記）のキャンバーウェル（図③）への移動は、労働者階級の生産に重きが置かれたロンドン内部の地区から、ロンドン南部の郊外ブリクストンの近くにあるミドル・クラスの消費に重きが置かれた地区へ移動である。だが、そのように焦点が移っても、人間と空間の関係および個人と社会の関係は変わらない。一八九三年六月、ギッシングはデヴォン州からブリクストンへ引越していたが、このブリクストンでの生活はロンドン中心部を支配するイデオロギーが郊外にも浸透していることを彼に認識させただけだった。鉄道のような交通機関が都心の経験を経験を郊外まで伝えていたからである。十九世紀の郊外は都市と距離を保つことを理想と



図③ 1870年代のロンドン郊外、キャンパーウエル・グロウヴ

していたにもかかわらず、都市との結びつきにより維持・管理されていた。英国支配下の平和に支えられた一八五〇、六〇年代の大好況期に最も富裕化して経済的実力階級となったミドル・クラスの郊外の住人たちもまた、ロンドンの中心に住む労働者階級と同様に物質主義、商業主義、資本主義といった目に見えない都会の支配勢力に従属していたのである。

ロンドンの郊外は一八六〇年代から急速に発達して八〇年代にピークに達している。<sup>(1)</sup>十九世紀前半の都市化とは対照的に、ヴィクトリア朝後期に見られたのは都会からの脱出である。かつての郊外は都市生活の最も墮落した部分（賤業者や犯罪者）を遠ざけるための場所だった。昔の都市警察には原始的な監視能力しかなかったので、郊外が無法地帯と思われていたのも当

然である。<sup>(2)</sup>だが、郊外はやがてロンドンで激増した労働者たちと距離を置き、自分の富を物質的に認識したい新興ブルジョア階級の理想の場所となった。『五十年祭』のキャンパーウエルは、十八世紀末には人家がまばらな寒村にすぎなかったが、百年後には人口が約二十五万人となり、ロンドンのミドル・クラスが住む郊外の縮図と見なされるようになっていた。

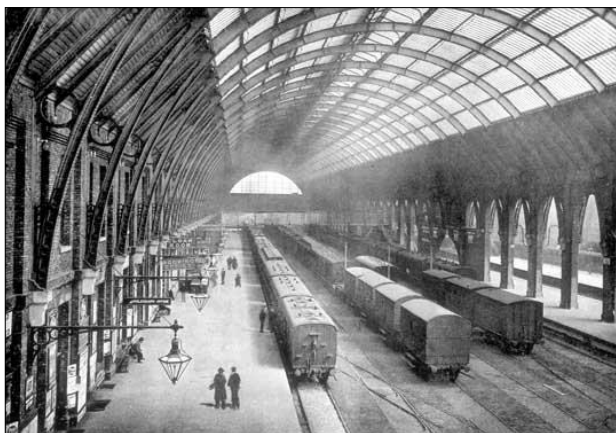
ギッシングはミドル・クラスの価値観の支配——都市に集中する産業・経済の発展を重視することや精神的な生活（芸術志向の生活）を軽視すること——を恐れていた。これが『五十年祭』の中心テーマとして郊外生活の空虚さに焦点が当てられた理由である。サバービア（郊外生活特有の様式・風俗・習慣）の現実とは、『暁の労働者たち』のヘレン・ノーマンが郊外のハイペリーで送るような理想化された半田園的な隠棲生活とは違っている。ギッシングはそのことをブリクストンでの経験によって悟っていた。その証拠に、『五十年祭』のキャンパーウエルは<sup>リスベックリヤ</sup>世間体と地位の向上に執着するミドル・クラスの虚栄と偽善が支配した郊外として描かれている。

ヴィクトリア女王の即位五十年記念式典（一八八七年）には、世界中の様々な国から代表者たちが表敬のために出席し、その豪華絢爛たる祝賀行進（本書第八章・図⑤）を見たロンドンの人々は、太陽が没しない大英帝国の無敵を誇る威容を初めて体験した。この五十年祭はイギリスの発展や変化の象徴と見なされたが、そうは思っていなかったギッシングの態度は実に冷や

やかである。「郊外の神 (suburban deity)」(第五部第三章) と呼ばれるサミュエル・バームビーにとつて、五十年祭を祝うのは英国の「五十年の発展が完了したことを祝う」ことであり、それは「人類の歴史に前例のない国家的な発展」(第一部第七章)に他ならない。郊外社会のイデオロギーを体現するバームビーを通して、サバービアが首都ロンドンの社会システムから分離されておらず、むしろその本質的な一部であることをギッシングは強調している。経済的に成功したバームビーは郊外のキャンバーウエルの中心にあるダグマー・ロード(ダグマーはデンマーク語で「栄光の日」の意)へ引越すことができた。だが、彼が「ダグマー・ロードという住所の魅力を密かに認めていた」(第四部第一章)ことは、国家が発展しているという考えも、郊外が汚濁の都市から分離されているという考えも、自己欺瞞的な虚構にすぎないことを示している。

広告業に携わるラックワース・クルーは文明の発展に関して「近代の科学と広告の技術がなかったならば、どうやって私たちは今のようになり得ただろうか」(第一部第八章)と言う。このような考えはキングズ・クロス駅の構内(図④、本書第十六章・図②)に見られる近代文明の象徴としての広告、「一ヤードでも利用できる壁があれば、至る所で人の目に訴える広告」(第五部第二章)と結びつけられる。鉄道駅の列車が広告の伝播性を連想させるのは、この交通機関が商業主義というロンドンを支配するイデオロギーを郊外および国内の隅々まで伝達する

からに他ならない。それまで画然と隔てられていた都市と郊外が鉄道によって連結され、都市も郊外も商業主義の影響を受けて同一化されるという現象は、ヴィクトリア朝末期になって特に顕著になっていた。ミドル・クラスを描いたギッシングの一九〇年代の作品は、そうした史実を数多く収納した宝庫なのである。



図④ キングズ・クロス駅の構内 (1895年)

## 第四節 現実の都会と虚構の田舎

後期ヴィクトリア朝も時代が進むにつれ、ロンドンから遠く離れた地方の農村生活は、鉄道を通して都会から押し寄せる新聞、雑誌、観光客、そしてギッシングのような長期滞在者などのために、都市郊外のような生活に変貌しつつあった。歴史家トレヴェリアンの指摘にあるように、一八七〇年の初等教育法によってヴィクトリア朝末期には田舎の農業労働者やその家族たちも読み書き能力を持つようになり、軽い記事と写真からなる廉価な日刊大衆紙『デイリー・メール』（一八九六年創刊）などが至る所で読まれていたのである。ロンドン万博があった一八五一年は都市と農村の人口が同じになった記念すべき年であるが、それから半世紀の間に農場労働者は半減してしまっていた。都会生活の悲惨さや工場労働の苦勞を聞いても、都会へ出たいという彼らの希望は抑えられなかったのだ。W・J・リダーが言うように、田園生活への憧れは支配階級の感傷にすぎず、農民にとっては田舎の風景を破壊する鉄道も都会の素晴らしい生活につながっているように見えたのである<sup>(15)</sup>。

確かに、鉄道が通っていないデヴォン州の内陸部などでは理想的な田園生活が残っていたが、少なくともギッシングの田舎の描写には常に文化的エンクレーブへの逃避という私的願望が隠されている。言葉を換えれば、彼の小説における田舎は決し

て現在の現実ではなく、都市の商業主義から逃れるための慰安の地という虚構にすぎないのだ。都会が裏舞台となって田舎が表舞台となる随筆集『ヘンリー・ライクロフトの私記』（一九〇三年、以下『私記』と略記）ですら、ロンドンの支配から脱してはいない。

一八九四年九月、ギッシングはロンドン南東の郊外エブソムへ移ったが、三年後には肺気腫を患い、田舎へ引越すように医者に命じられた。その時すでに彼はイーディス・アンダーウッドとウッドと衝動的な再婚をしていたが、彼女が階級的にも知的にも意に満たなかったもので、九七年二月にはエブソムから逃れ、デヴォン州の海岸町バドリ・ソルトトンに行って一人暮らしを始めた。やがて、九八年七月から中産階級のフランス女性ガブリエル・フルリと関係を持つようになり、これが失意の時の慰めとなる。しかし、ここで見落としてならないのは、フランスで送るようになるガブリエルとの重婚生活においても、彼が本当の満足を見出せなかったことだ。彼は幸福の最中にあっても、英国を離れたことや大都会ロンドンの知的刺激がなくなったことを嘆いていたと考えられる。なぜならば、ガブリエルは一九〇一年六月にH・G・ウェルズへの手紙(Letters 8: 202)で「彼は生まれつきの不満足家です。……彼にとつて常にパ、ラ、ダイスは、自分のいない場所にあるのです」(傍点は筆者)と語っているからである。

ギッシングは『私記』の焦点を境界線が細かく画定された都

市空間からデヴォン州エクセターの田舎家に移している。一八八五年八月の手紙の中で、彼は「六ヶ月ほど本当の田舎家でゆっくりとホームマーでも読めるのであれば、人生の一年ぐらいをあげてもよい」(Letters 2: 337)と書いていた。近代都市からの私的逃避というのはギッシングの生涯と作品にとって重要な概念である。語り手ライクロフトと作者ギッシングの見解の類似性は少なくとも表面的には明らかだ。『私記』を「小説というよりは薄い仮面をつけた個人的回想」(Halperin 307)と呼んだジョン・ハルペリンのように、この作品を多くの批評家が作者の「精神的な自伝」(Lowell 41)として見ている。だが、ギッシングが一九〇三年二月の手紙(Letters 9: 58)で『私記』を回想録というよりは熱望と言っていることから、作者と語り手のギャップに留意せざるを得ない。この手紙は『私記』の虚構性を語っていると言えるのではあるまいか。ギッシングが近代都市で抱いた疎外感逃避願望を育んだが、ロンドンに対抗するための実現可能な代替物は、実際にはどこにもない理想郷として以外に何ら提示されていないからである。

シャーロック・ホームズが四十九歳で探偵を引退して風光明媚なサセックス州の丘で読書と養蜂という隠遁生活に入ったように、文筆家のライクロフトは五十歳の時に亡友から終身年金を遺贈されてデヴォン州の田舎家(図⑤)に隠遁した。しかし、ライクロフトの田舎への逃避もまた私的なもので、非現実的だと言わねばならない。『私記』の「序文」によれば、ライクロ



図⑤ アーサー・クロード・ストローン『デヴォンの田舎家』(1901年)

フトはロンドンを去る前に著述業に別れを告げ、出版用にはもう一行も書きたくないと言っている。それに対し、ギッシングの方はロンドンを離れても書き続け、まだ文学的・商業的成功を望んでいた。ライクロフトとは違って、ギッシングは依然として文学市場を意識し、田舎で生活する自分自身を外界であるロンドンの意志に従わせねばならないと考えていたのだ。ピエール・クステイヤスが道破したように、語り手ライクロフトの

田舎への逃避は決して作者ギッシングを満足させていなかった<sup>17</sup>のである。

一八九一年から九三年にかけてデヴォン州エクセターに住んでいた頃、ギッシングは自分の芸術の源泉たるロンドンから離れすぎてしまったと感じていた。それは「このデヴォンで二年ほど浪費してしまつたようだ。私の題材があるのは明らかにロンドンだ」(Letters 5: 104)と九三年四月に第アルジェノンへ書き送った手紙から分かる。ある程度の金銭的余裕があるライクロフトのような隠遁した文筆家は別にして、知性と教養を求める若者たちにとって、ロンドンから離れることには深刻な損失が伴う。文学界での出世という野心を持つ『三文文士』(一八九一年)のジャスパー・ミルヴェインにとって、「どこか郊外に小さな家を持つ」ということは「野心を幾らか放棄する」(第三十四章)ことを意味する。ギッシングは売れない作家エドウィン・リアドンに次のように言わせている。

「……<sup>イギリス</sup>は知力を意識していたので、自分にとっての唯一の場所はロンドンだと思っていた。……<sup>イギリス</sup>は私たちはロンドンについて今なお知的生活の唯一の中心地であるかのように考えているのさ。……だけど、実際、今日の知識人はロンドンから逃避しようと懸命になっている——一度この場所のことが分かっ  
てしまつとね。……ロンドンに住まなければならないのは、特殊な仕事に携わっている稀な場合だけだよ。……このロンドン

が知力のある若者たちを鬼火のように引きつけているのは大きな不幸だね。彼らはロンドンに出てきても、墮落するか身を滅ぼすかのどちらかだ。彼らの本当の領域は田舎の平和な生活なのだ。ロンドンで成功できるタイプの間は、多かれ少なかれ冷淡でシニカルな人間なのさ。……」(第三十一章)

これは文学市場の生存競争に負けた敗残者による〈酸っぱい葡萄〉と〈甘い檸檬〉の論理である。この合理化がうだつの上がらないストレスに対するリアドンの防衛機制なのか、ギッシングが自分のストレスを彼に投影した結果なのかはさておき、<sup>18</sup>デイクেনズのようにロンドンで成功することが「鬼火」(鬼火、<sup>イギリス</sup>「Fairyland」)のように追つてみても達成できない望みと分かっているながら、「特殊な仕事に携わっている」ギッシングは追わずにいられたかったのではないだろうか。そして、(理性では押さえることができる)この衝動こそ彼の都市に対する両価感情の源であるように思えてならない。

そのような衝動はライクロフトにも見られる。ライクロフトの都会から田舎への物理的な退却は、メアリ・ハモンドが言うように、孤独で内省的な生活を送ると同時に、中途半端な教育を受けた大衆のためではなく、自分自身のために書くという精神的・芸術的な意味を持つ退却だと言える。<sup>19</sup>とはいえ、ロンドンの「昔なじみの恐ろしい場所」(dear old horrors)へのライクロフトの(強迫観念と言つてもよい)懐郷<sup>イギリス</sup>の念を、彼が若い頃に

抱いた「野心」や「希望」(「春」第十章)と切り離して考えることはできない。ライクロフトは自発的にロンドンから離れたにもかかわらず、彼の意識は常に現実の都会へ引き戻されている。田舎のことを考えている時でさえ、それは以前のロンドン生活の現実とのコントラストにおいてのみ重要なのである。『閑居幽棲の作家 (An Author at Ease)』という『私記』の原題が暗示するように、ライクロフトは都会を離れることで実質的な活動をやめて世を捨てたのだが、これは一種の精神的な自殺である。ロンドンで生活することは大英帝国の中心で生きることであり、その圏外で生きようとするのは非現実と死を受容することに他ならない。ロンドンはギッシングの小説における唯一の現実だったのであり、『私記』の田園生活ですらロンドンに支配されていたのである。

ライクロフトの田舎は後期ヴィクトリア朝の社会で疎外された知識人や芸術家の現実逃避への衝動を映し出した虚構の地だと言える。この虚構性はギッシングが逃避願望を成就できないことを示している。ギッシングは自分の芸術の中で新世界を創造することも社会を再構築することもせず、ただ近代社会の現実の中で実現不可能な私的理想空間を描いているだけなのである。マーティン・ウィーナーは「世界初の産業国では、産業主義は都市化を率先したが、完全になじんでいたわけではなく、英国国民は都市を無視したり、蔑んでいた」と言っている<sup>(20)</sup>。しかし、ギッシングが都市を蔑むことはあっても、無視したりする

ことは決してなかった。ロンドンはそのから周縁化されたギッシングにとって彼の小説の中心だったのだから。ギッシングは真善美の追求、獲得した知識の伝達、人に感動を与える精神活動といった狭義の文化を何よりも重視していた。彼の場合、そうした文化を育む社会は、たとえバビロンのように華美で悪徳がはびこっていたとしても、少年時代の古典学習で燦然と輝いていた古代のローマやアテネのように文明化された大都市、すなわちロンドン以外に考えられなかったのである。

\* \* \* \* \*

ロンドンの現実に幻滅して、郊外の田園都市に引越そうが、田舎に安住の地を求めようが、ギッシングは実際そこに住んでしまうと、都会の文化と知的な刺激を求めざるを得なかった。もともと、一九〇三年の年末にピレネー山麓の村で四十七歳の短い人生を終えることなく、ロンドンへ戻ることができていたとしても、すぐまた彼は都会生活を呪って文化的エンクレーヴとしての田舎や外国に逃避していたであろう。妻ガブリエルの言葉は正しかった——生まれつきの不満家であるギッシングにとっては、「自分のいない場所がパラダイス」だったのである。

## 註

(1) ネオ・ゴシック様式の重厚な建築物は、ヴィクトリア朝の経済を牛耳った中産階級の俗悪な成金趣味と結びつけられることが多

- い。例えばE・M・フォースターは、『ハワーズ・エンド』（一九一〇年）の第二章で無限を暗示するキングズ・クロス駅に対して、「上辺だけの壮麗な（facile splendours）」が目立つセント・パインクス駅を蔑視した。しかし、ギッシングは「五十年祭」でキングズ・クロス駅構内の広告を「文明が生み出した屑」（第五部第二章）と言っている。
- (2) George Orwell, "George Gissing," *Collected Articles on George Gissing*, ed. Pierre Coustillas (London: Frank Cass, 1968) 50.
- (3) Asa Briggs, *Victorian Cities* (1963; Harmondsworth: Penguin, 1980) 349-50.
- (4) Peter Keating, *The Working Classes in Victorian Fiction* (London: Routledge, 1971) 24.
- (5) ジェイコブ・コールグが指摘するように、ブースが詳細に記述したロンドンには、ギッシングが知っていたロンドンと同じで、メイヒューの著書がディケンズ小説の確証となったように、ギッシングの写実の正確さを裏づけている (Kong 32)。
- (6) ロンドンから遠く離れたウォンリーの村はウィリアム・モリスの理想の保守版だと言えよう。それは歴史の進行を逆にした非現実的な、社会のエリートにとって周縁的な避難所にすぎない。皮肉にも、『民衆』における産業都市の破壊と田園の回復は、モリスの社会主義宣伝の物語『ユートピア便り』（一八九一年）で起こる田園化の過程と同じ道をたどっている。ギッシングもモリスも産業革命による社会の変化に反対する立場だが、モリスが特権階級の芸術を労働者階級にも普及させるためにユートピアをロンドンに置いて社会全体の再生を考察したのに対し、ギッシングは芸術を基本的に貴族やインテリゲンチヤのものと考えていた。
- (7) Gareth Steadman-Jones, *Outcast London: A Study of the Relationship between Classes in Victorian Society* (London: Clarendon, 1971) 240.
- (8) J. R. Kettel, "The Railway as an Agent of Internal Change in Victorian Cities" in *The Victorian City: A Reader in British Urban History, 1820-1914*, ed. R. J. Morris and Richard Rodger (London: Longman, 1993) 181-208.
- (9) Steadman-Jones 161.
- (10) Raymond Williams, *The Country and the City* (London: Chatto and Windus, 1973) 161.
- (11) Kettel 149-80.
- (12) Donald J. Olsen, *The Growth of Victorian London* (Harmondsworth: Penguin, 1976) 191.
- (13) V. T. J. Arkeil, *British Transformed: The Development of British Society since the Mid-Eighteenth Century* (Harmondsworth: Penguin Education, 1973) 85.
- (14) 大都市圏での鉄道の拡張によって郊外に住むようになった人たちについては政治的・社会的調査がなされなかったし、ギッシング以外に彼らに関心を示した小説家もほとんどいない——ジャック・シモンズはそう述べている。Jack Simmons, "The Power of the Railway" in *The Victorian City: Images and Realities*, ed. H. J. Dyos and Michael Wolff, 2 vols. (London: Routledge, 1973) 1: 299. 例えば、シティーまで鉄道で通勤するマムフォード氏とその妻が金のために受け入れた下宿人に家庭を乱される『下宿人』（一八九五年）では、郊外のサットンに住みながらもロンドン時代の思考から抜け



出せず、世間体を最優先する下層中産階級の哀れな姿が、アイロニーの対象となっている。なお、「ヴィクトリア時代に根を下ろし、揶揄や嘲笑を浴びながら、近現代のイギリス文化を逆説的に支えてきた」下層中産階級についての考察は、新井潤美『階級にとりつかれた人びと』（中公新書、二〇〇一年）が詳しい。

(15) G. M. Tevelyan, *English Social History* (1942; Hammonds: Penguin, 1982) 588-89.

(16) W. J. Reader, *Life in Victorian England* (London: Batsford, 1964) 53.

(17) Pierre Coustillas, "Gissing's Variations on Urban and Rural Life" in *Victorian Writers and the City*, ed. Jean-Paul Hulin and Pierre Coustillas (Villeneuve d'Ascq: Publications de l'Université de Lille III, 1979) 143.

(18) 一九〇〇年十月三十一日、漱石はロンドン塔を見物する前に群集や交通に圧倒され、これから始まる留学生活で神経をやられるようなストレスを覚え、「マクス・ノルダウの退化論」を信じる心境になっている。ノルダウの著書『退化論』（一八九二年）によれば、近代の芸術家は過密する都市や工業化された生活によって脳の中樞が冒された病人と見なされる。産業革命を経て環境が激変したロンドンで適合できずに疎外感に苦しんだギッシングも、『三文文士』のリアドンのように人間社会と同様の熾烈な「本の社会における生存競争」（第三十三章）でストレスを味わっていたはずである。

(19) Mary Hammond, "'Amid the Dear Old Horrors': Memory, London, and Literary Labour in *The Private Papers of Henry Ryecroft*" in *Gissing and the City: Cultural Crisis and the Making of Books in Late Victorian England*, ed. John Spiers (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2006) 176.

(20) Martin J. Wiener, *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit, 1850-1980* (Cambridge: Cambridge UP, 1981) ix.